
ぐしゃり、と真昼

安藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぐしゃり、と真昼

【Nコード】

N3774B

【作者名】

安藤

【あらすじ】

マリーという少女が主人公の一話完結型シリーズ作品です。

良く晴れた真昼。

白昼夢も裏返しそんな寒さが、剥き出しの肌を刺している。
はあ、と溜め息にも似た息を吐けば、白く薄化粧を施され、高く高く空へ。

いつかその吐息は、雲に変わるのだろうか、とアリストテレス。

そんなおとぎ話を何度か反芻してから、タケルは足元を見下ろした地上から数十メートル真上に、タケルの両足爪先部分が顔を覗かせている。

少しでも空に近い場所を、と彷徨い歩いて見つけた廃ビルの屋上は12月半ばの寒々しい風を遮断する事なく、タケル目掛けてぶつかって。

ゆらりぐらりと動かされる身体の動きを、ゆっくりとしたリズムに変換し、目を瞑る。

何もかもが綺麗だった、あの頃に戻りたい。

呪文のように頭の中で反芻してから目を瞑り、一息飲み込んだ。
終わりと始まりの鐘が、ぐわぐわと鳴り響く耳の奥。

降ろした目蓋の裏側で、手招きをしているのは誰だろう、と思案した時。

「ねえ、ここから飛び降りるのはヤメてくれないかしら」

真後ろからの声に、ビクリと肩を震わせ、タケルは恐る恐る振り返ってみる。
ドクドクと心臓が脈打ち、何かしらの後ろめたさが襲い掛かってくるようだった。

「悪いけれど、他の場所選んで欲しいの」

視界に捉えた少女は、何とも奇怪な出で立ちをしていた。

眉より幾らか上で平行に切り揃えられた前髪。

頭の、黒と白のレースがあしらわれたヘッドドレスは、赤い薔薇のような花が、

そのヘッドドレスの真ん中を一直線に彩るように咲き乱れ、サイドからは緩くロールの掛かった髪が、肩まで降りている。

赤と黒の別珍で作られたセパレートは、例に漏れず白のフリルが主張をし、

胸元は、黒の紐が編みこみを作り上げ、鎖骨の辺りで蝶結びをされている。

肩からはケープを覆い、首元には真っ赤なコサージュ。

膝丈のスカートも、ボリウムを含んだもので、赤と黒、そして白が基調を保っているようだ。

ソックスは、ラッセルレースにサテンリボンの付いたストッキングタイプで

その殆どが、黒のブーツに覆われ見えないが、リボンの部分だけがブーツの上に顔を覗かせている。

まるで、バッキンガム宮殿にでも居そうなその少女は、
雨も雪さえも降ってはいないのに、黒い日傘のようなものを差して、
タケルをじっと見つめていた。

「ごめんね、別に邪魔する気はないけれど、ここから飛び降りるのはやめて欲しいの」

日傘の柄をくるくると回しながら、その少女は一度視線を下に落としました。

そしてもう一度タケルを見ると「ね、聞いてる？」と柔らかく微笑んだ。

「…キミは、だれ？」

掠れるような声でタケルが問うと、少女は、くるくる回していた日傘の動きを止め

「そんなこと聞いて、どうするの？」と答えながら、日傘を丁寧に折り畳んだ。

小さな身長と小さな顔とは対照的に、大きな丸い目がタケルを捉える。

まるで全てを見透かしているようだ。深く、吸い込まれそうな黒い瞳。

「わたし、マリーって言うのよ。覚えておいても得なんてないと思うけど」

「…マリー。そう、マリーって言うんだね。僕は、」

「いいの、あなたが誰かなんて興味ない。」

「…そう。悪かったね」

「でも、得なんてないと思うけど、名前、聞いてあげるわ」

言って、マリーはフフツと笑った。

「タケル。僕の名前はタケル」と告げれば、再びフフツと笑って「知ってる」

タケルは、マリーと名乗るこの少女が不思議だと感じた。

ただでさえ出で立ちだけで妙な印象を受けるが、こんな廃ビルに、この少女。

良く良く思えば、ミスマッチしているようでもあり、妙な情緒と統一感もある。

「なあ、マリー。キミは僕が何をしようとしていたか知っているのかい？」

訥々と問えば、相変わらずの笑みで「知ってる」と答えた。からかっているのだろうか。名前すら知っていると答えたこの少女は。

「ヒューン、と飛んで、ぐしゃり、って。そうしたいんでしょう？」

細く可愛らしい声には似合わない言葉だった。けれど、それは図らずも正解だ。

「うん、そう。だから止めて欲しくないんだ。分かるかい？」

幾らかイラつき始めている自分に気付いていた。

もう言葉さえ発することなく、自分はその頃に戻る予定だったのに。

ひよんな事で現れたマリーのお陰で、予定は丸つぶれ。

「あら、別に邪魔はしないって言うてるでしょう？タケル、あなた何を聞いていたの？」

「邪魔をしないなら、声を掛けて欲しくはなかったんだ」

「だから、ここでそれをされるのはとても困るの。困る、というよりは、迷惑よ」

「迷惑？キミは一体何なんだ。こんな場所に、どうして居るんだ」

問い詰めるように捲くし立てれば、マリーはペタリと地面に座り込んだ。

そして、冷たい地面、詰まる所、コンクリートに手のひらを付くと、ポツリ。

「ここは、わたしのおうちなの。だから迷惑よ、死ぬなら他を選んで」

「ここがキミの家だって？この廃ビルが？僕をからかっているの？」

「タケル、あなたをからかっている暇なんて無いわ。ここはわたしのおうち」

「全く分からない。理解が出来ない。キミは頭がどうかしちゃってるんだ！」

吐き捨てるように浴びせ掛けてから、タケルはハツと口を押さえた。何をこんなイライラしているのだろう。会ったばかりの少女に罵倒を浴びせ掛けたりして。

「う…う、めん…」

「気にしていないわ。あなたに理解して欲しいとは思っていないの」

「…ごめん。ごめんな…」

「わたしはタケルとは違う个体だから、理解なんて元々出来ないのよ」

再び苦笑して、マリーは立ち上がった。

タケルの横に立つように、屋上の際に足を掛け、ゆらりぐらりと身体を揺蕩わせている。

爪先は完全に宙に出ている。恐怖も無いような表情で、じっと下を見つめて。

別に、ここが死体の山になったって、自殺の名所になったって構わないの。

ただね、そうしたら野蛮な人達がここに入り込んできて、黄色いテープを貼るのよ。

そうしたらわたし、おうちに入れなくなっちゃう。警察の人がね、ダメって言うのよ。

迷惑なことでしょうか？わたしのおうちなのに。みんな、バタバタ飛び降りてゆくの。

ねえ、聞いてる？タケル。本当に迷惑な事だと思わないかしら。

ゆらりぐらりと揺れながら、マリーが呟いた。

類は赤みも差してはいないが、実態のないような恐怖は感じない。

タケルは一步後退すると、力が抜けたようにその場にへたり込んだ。妙な恐怖は、マリーに対してではなく、死という曖昧な概念からだろうか。

はぁ、と息を吐けば、再び薄化粧。

「それが賢明ね」

「結局：僕はキミに邪魔をされてしまったよ」

「フフツ。知ってる？ここから空を目指したって、確立は五分五分だっ」

「五分五分…？それはつまり、死ねないってこと？」

そうね。半分は生きて半分は死んだわ。
ただ、生きても、二度と歩けなかったり、酷く顔が破損したり。
どっちにしるロクな生き様にもなりはしないわね。フフツ。

その言葉に、タケルの背筋にゾクリと悪寒が走った。

ファイファイファイファイで生き延びた場合を考えると、それは恐ろしい。

彼女が「賢明」だと言った言葉にも頷けた。

「人って脆いものなのね。一部が壊れたり、全部が壊れたり。」

「・・・それだけが人なら、先に光なんてないだろうな」

「フフツ。けれど、生きるからこそ世界は美しいのよ？タケル」

「それは、僕を諭しているのかい？」

タケルが問うと、マリーは再びフフツと笑った。

そして、後方のタケルを振り返ると、一言だけ返し、笑う。

「まさか。生きる権利と死ぬ権利は、等しく個人にあるものでしょう？」

あ、と声を上げる間もなく、マリーの身体は後へと重力に従った。
ふわりと後方へ倒れると、一気にタケルの視界からその姿が消えてしまった。

「マリー！」と、あらんばかりの声を上げて、コンクリートの切れ端に近づいたタケルは、

遙か下の地面を覗き込んだが、そこには予想をしていたような惨事は無い。

マリーの言った「ぐしゃり」もなければ、彼女の姿すらそこには無く
ただ、タケルの手元には、彼女の差していた黒い日傘が。

良く晴れた真昼。

白昼夢も裏返りそうな寒さが、剥き出しの肌を刺していた。
そんな真昼の、短い夢。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3774b/>

ぐしゃり、と真昼

2010年10月10日23時44分発行